

明治学院大学 2018年度 公開セミナー

テーマ 「さらば大学」

◆ 日時：2018年 11月 13・20・27日・12月 4・11・18日
16時45分～18時15分（毎週火曜日 全6回）

◆ 会場：明治学院大学 横浜キャンパス 7号館 720 教室
JR戸塚駅東口バスターミナル8番乗場江ノ電バス「明治学院大学南門」行乗車約10分、終点下車すぐ

無料

申込
不要

近隣・構内駐車場
ありません
公共交通機関を
ご利用ください

- ◆ 第1回 11月 13日(火) 田中 優子 (法政大学総長) 対談
- ◆ 第2回 11月 20日(火) 内田 樹 (思想家) 対談
- ◆ 第3回 11月 27日(火) 加藤 典洋 (文芸評論家) 対談
- ◆ 第4回 12月 4日(火) 原 武史 (放送大学教授) 対談
- ◆ 第5回 12月 11日(火) 上野 千鶴子 (社会学者) 対談
- ◆ 第6回 12月 18日(火) 高橋 源一郎 **最終講義**

第1～5回 対談 高橋源一郎 (作家、明治学院大学教授)

2018年度公開セミナー「さらば大学」へ向けて

大学を取り囲む環境は日々過酷なものになっています。少子化による学生数の急減、社会環境の激変による社会から大学への要請の変化あるいは社会からの圧力の強化、そして、大学における研究や教育そのものの意味の問い直し。どれも解決の目処さえつかぬ難問です。かつて「象牙の塔」といわれた大学は、もはや、社会から孤立してはいられなくなりました。いや、もしかしたら、もともと大学以上に社会の風圧に晒される存在はないのかもしれない。では、どうすればいいのか。そんなことを考える暇もないほど、次々に新しい問題が大学を襲っています。個人的ではありますが、わたしは2018年度をもって大学教員を退職(定年)します。研究所所長として、大学教員としての最後の仕事に、この問題を取り上げたいと思いました。「さらば大学」は、わたし自身が大学へ贈ることばになりますが、同時に、苦しみ悩む現在の大学が不死鳥のように蘇ることを期待してのことばでもあります。あえていうまでもなく、大学について考えることは、この世界について考えることでもあるはず。この問題について、深く考え悩んだであろう大学関係者をお招きし、徹底的に議論してゆきたいと思っています。みなさまのご参加を期待しています。

国際学部附属研究所所長・高橋源一郎



田中 優子 たなか・ゆうこ

1952 年生まれ

江戸文化研究者、法政大学総長

1980 年から法政大学教員。2014 年総長就任。専門は江戸時代の文学・生活文化、アジア比較文化。日本私立大学連盟常務理事、サントリー芸術財団理事など。著書に、『芸者と遊び 日本的サロン文化の盛衰』（角川ソフィア文庫、2016）、『自由という広場』（法政大学出版会、2016）、『世渡り万の知恵袋』（集英社文庫、2015）、『江戸の想像力』（ちくま学芸文庫、1992）、共著に、『毒死列島 身悶えしつつ（追悼 石牟礼道子）』（金曜日、2018）、『いま、「非戦」を掲げる—西谷修対談集』（青土社、2017）、『日本問答』（岩波新書、2017）など多数。

内田 樹 うちだ・たつる

1950 年生まれ

思想家、武道家、京都精華大学客員教授
神戸女学院大学名誉教授

1990-2011 年神戸女学院大学教員。専門はフランス現代思想。学塾・凱風館を主宰。著書に、『街場の読書論』（潮新書、2018）、『街場の憂国論』（文春文庫、2018）、『ローカリズム宣言』（デコ、2017）、『日本 辺境論』（新潮新書、2011）共著『「農業を株式会社化する」という無理』（家の光協会、2018）、『もの言えぬ時代』（朝日新書、2017）、『アジア 辺境論』（集英社新書、2017）、編著『人口減少社会の未来学』（文藝春秋、2018）など多数。Web ブログ「内田樹の研究室」開設中。

加藤 典洋 かとう・のりひろ

1948 年生まれ

文芸評論家、早稲田大学名誉教授

明治学院大学（1986-2005）を経て、2014 年まで早稲田大学教員。著書に、『どんなことが起こってもこれだけは本当だ、ということ。』（岩波ブックレット、2018）、『対談 一戦後 文学 現在』（而立書房、2017）、『もうすぐやってくる尊皇攘夷思想のために』（幻戯書房、2017）、『敗者の想像力』（集英社新書、2017）、『敗戦後論』（ちくま学芸文庫、2015）、共著『白井晟一 原爆堂 四つの対話』（晶文社、2018）など多数。月刊『図書』（岩波書店）にコラムを連載中。

原 武史 はら・たけし

1962 年生まれ

政治学者、放送大学教授、
明治学院大学名誉教授

山梨学院大学、明治学院大学を経て 2016 年から現職。専門は日本政治思想史。著書に、『松本清張の「遺言」』（文春文庫、2018）、『（女帝）の日本史』（NHK 出版新書、2017）、『皇后考』（講談社学術文庫、2017）、『日本政治思想史』（放送大学教育振興会、2017）、『「昭和天皇実録」を読む』（岩波新書、2015）、『大正天皇』（朝日文庫、2015）、『昭和天皇』（岩波新書、2008）、監修『昭和天皇 御召列車全記録』（新潮社、2016）、など多数。月刊『本』（講談社）に「鉄道ひとつばなし」長期連載中。

上野 千鶴子 うえの・ちづこ

1948 年生まれ

社会学者、立命館大学特別招聘教授、
東京大学名誉教授

1979 年から大学で教鞭をとり 1993-2011 年東京大学教員。専門は女性学、ジェンダー研究。認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長。著書に、『情報生産者になる』（ちくま新書、2018）、『おひとりさまの老後』（法研、2007）、共著に、『上野千鶴子が聞く 小笠原先生、ひとり家で死ねますか？』（朝日文庫、2018）、『戦争と性暴力の比較史へ向けて』（岩波書店、2018）、『おひとりさま vs. ひとりの哲学』（朝日新書、2018）など多数。Web 「WAN 上野研究室」で情報発信中。

高橋 源一郎 たかはしげんいちろう

1951 年生まれ

作家、明治学院大学教授、
国際学部付属研究所所長

2005 年から明治学院大学教員。著書に、『今夜はひとりぼっかい？ 日本文学盛衰史 戦後文学篇』（講談社、2018）、『ゆっくりおやすみ、樹の下で』（朝日新聞出版、2018）、『お釈迦さま以外はみんなバカ』（インターナショナル新書、2018）、『ぼくたちはこの国をこんなふうにあふに愛することに決めた』（集英社新書、2017）、共著『水俣へ』（岩波書店、2018）など多数。月刊『新潮』（新潮社）で小説「ヒロヒト」連載中。NHK ラジオ第 1「すっぴん!」金曜日パーソナリティ。

昨年度公開セミナー「憲法が変わる（かもしれない）社会」が本になりました！

『憲法が変わるかもしれない社会』 文藝春秋 1500 円（税別）

長谷部恭男、片山杜秀、石川健治、森達也、国谷裕子、原武史——高橋源一郎の白熱講座へ、ようこそ！

この公開セミナー出席者の過半は大学外部の人たちであり、とりわけ、キャンパスのある戸塚近辺の住民の方が多い。それも、リタイアした後、ひとりの個人としてもう一度、なにかを学びたいと切実な欲求を抱いた人たちだ。ありていいうなら、それらの人たちは、学生たちよりも強い「向学心」を持っているといってもいいだろう。わたしは、長年、この公開セミナーをお手伝いしながら、いつも彼らのことを考えていた。もし、大学に「未来」があるなら、そんな彼らの力が必要かもしれない。そんなことを考えながら、「外部」へのメッセージとして付け加えたのが、大学らしくない、（かもしれない）の文言だった。もちろん、内容についても同じことがいえるだろう。「大学」や「学問」の枠組みの中で、「憲法」について考えてゆくことと、「憲法が変わってゆく、あるいは、変えられてゆく、時代や社会」について、いま自分自身が社会の中でどんな役割を果たしているのかということに直面している人たちと共に考えることは、違はずである（もちろん、学生たちも同じ問題に直面しているはずなのだが、その危機意識の度合いを比べるなら、「外部」の人たちにはかなわない）。

（中略）ぜひ手にとり、その特別な場所で何があったのか、読んで知ってもらいたいと思う。タイトル名が変わり、（かもしれない）がとれたのは、さらに広く深く伝えるためであった。

明治学院大学国際学部付属研究所『研究所年報』第 21 号、高橋源一郎「公開セミナー報告」より抜粋